



「子どもに寄り添う」とは？

—感性を育む環境づくりの中で—

井上 寿

私は幼児教育・保育が専門ではありません。仙田満という建築家に師事し、幼稚園や保育園をはじめとする子どもにかかわる建築や、家具、遊具の設計やまちづくりにかかわっています。そして子どもの成育環境に関する調査研究を行っています。このたびは非常に難しいテーマをいただきましたが、私は、子どもたちが元気に育つ環境づくりに取り組んでいる視点から考えてみたいと思います。

### 子どもを取り巻く環境のもつ問題

近年のOECD諸国を対象とした調査で、孤独だと感じている子どもの比率が日本は突出して高いこ

とが明らかになっています<sup>注</sup>。このことは、社会の中で自らの存在が認められているという実感がわかないこと、つまり自己肯定感をもてない子どもが多いということだと理解しています。あまりの他国との違いの大きさに、その問題の深刻さを感じざるを得ません。

子どもたちにとって、当然のことながら遊びは非常に重要であり、遊びを通じて感性、創造性、社会性、身体性を獲得し豊かに成長していくと考えています。

近年の子どもたちを取り巻くさまざまな社会的な変化から、遊び空間は一九六〇年代を境に急激に減少しています。一九八〇年代以降は外遊びも減り、遊び集団が小さくなり、子どもたちは群れて遊ぶことをあまりしなくなっています。また、多くの大人とかかわることも少なくなっています。

遊びは子ども同士のものだけでなく、大人との遊びも必要不可欠なものです。しかし、すでに現代の

親世代は、遊びを十分に体験できないで育った世代と言わざるを得ません。多くの人とのかわりの中で過ごす日常生活があたりまえでなくなった現代、何気ないコミュニケーションがわざわざ一つの目的になり、面倒くさいと感じるようになってしまっています。

こういったことが積み重なることで、子どもたちが社会の一員として自らを位置付けることがどういうことか、またどうしたらできるのかということを知得できずにいるのではないのでしょうか。

### 「感性」とは

話が変わりますが、子どもの成育環境を考える中で、「感性」を豊かに育む環境について考える機会があり、「感性」は学術的にはつきりとした定義はなく、英語でもそれを簡潔に訳す語がないということを知りました。

感性工学会によれば、「学術的な用語としての定

義はないが、一言でいえば『感性とは高次情報処理機能』である」、また「個性という性格基盤上に形成される能力」とも表現されています。

「感性とは、ある刺激に対して働く能動的な能力をもった働きである」とされている研究者もあり、また現代の日本語辞書等では「内面における感受性や、感受性によって受け取った刺激に対する反応を引き起こす力」ととらえています。

相馬一郎先生（早稲田大学）によると、「感性」とは「内外界の情報を感じ性という一種のアンテナによって、直感的、瞬間的、無意識的に受け取り、それを取捨選択して判断し、場合によっては五感で認識できる形を通して、自ら情報を発信するような一連の情報処理を行う働きをもつ。また、心の深い領域において他と交感を行うことにより心のエネルギーを発揮して人間性を高めていく道徳性であり、愛と調和、一体感を生み、人間の苦痛を癒し、感動や幸福感、満足感を与える力をもった、いわゆる内

面の感覚器官ととらえられる」と述べられています。

## 豊かな感性を育む環境に必要なもの

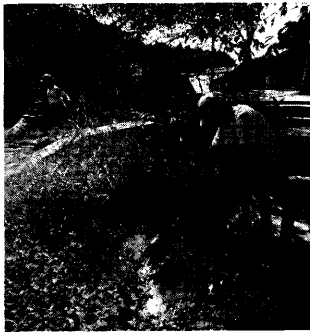
このようなさまざまな見解を調べながら、感性について自分なりに「さまざまな体験から得た事象を、自らの知識により理解し、評価する能力」と整理をしています。そしてその能力は、他者から受動的に学ぶことではなく、自ら能動的に得た体験を積み重ねることによつてのみ得られるものではないかと考えています。目の前に起こった事象を理解するためには、それを評価しなければなりません。評価するためには、起こったことが以前に体験したとことと比較してどういった違いがあるかを認識しなければなりません。そのためには、これまでの体験がただ単に与えられたものでなく、自らが評価した上で記憶の中に整理されていなければなりません。

こういったことから、私は「感性」を豊かに育てる環境に必要な要素として、次の5つを提案したい

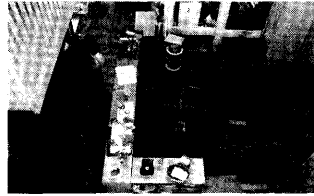
と思います。

- 1 本物の豊かで多様な体験
- 2 主体性（能動性）の保障
- 3 相対性の保障
- 4 継続性の保障
- 5 発見・気付きのための環境構成

できる限り多くの本物の体験をすること、そしてそれらが主体的な活動の中で展開することによつてしっかりと知識として整理され蓄積されます。ごく自然に自らの活動の内容を他と比較することができると、また環境の時間的・季節的な変化や活動の継続による物的・人的



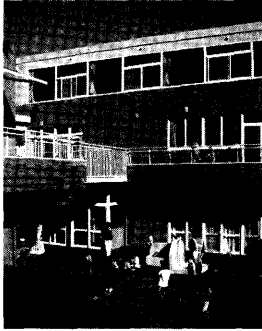
▲豊かな自然体験が可能な園庭  
(福島県)



▲継続的な遊びが可能な積み木コーナー（東京都）

## おわりに

「子どもに寄り添う」というテーマについて、環境を通じて向き合った時、子どもの活動に対して大人の取るべきスタンスが、豊かな「感性」を育む環境づくりと共通する点が多いのではないかと感じました。子どもたちがより多くのものに触れ、



▲見る一見られる関係が立体的に展開する園庭（東京都）

環境の変化を感じることも重要です。これらが子どもたちの日常的な活動領域にさりげない配慮とともに構成され、気付きを誘発する。そういった環境が望ましいのではないかと考えています。

それを主体的に理解し相対化することが重要で、それを常に見守りサポートすることが「寄り添う」ということと理解するとよいのでしょうか。

さらに極論すると、「大人が子どもの成育環境の一要素であるということ」を改めて認識し、ごく自然にあたりまえの生活をする事」のような気がします。実は日常的には忘れてしまいがちで、それによつて子どもが自ら、社会の一員としての自覚を主体的に獲得していく環境が自然に形成されるのではないのでしょうか。（環境デザイン研究所）

注 OECD25か国を対象にした15歳の意識調査において、日本の子どもの29.8%が「孤独を感じる」と答えた（第2位 アイルランド10.3%、第3位 フランス6.4%）。

Unicef: Innocenti Report Card 7, 2007  
Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries

写真提供：環境デザイン研究所